



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十一号

2023/01/30 発行

題字：高橋弘美

この雑誌を猛吹雪の中書いている。窓は吹きつける雪に覆われて見えなくなってしまった。こういう日には祖母に聞いた話を思い出す。昔はこんな吹雪の日に出歩くというと、家のすぐ目の前まで来ていながらどうしても家にたどり着けず、亡くなってしまう人がいたという。

その話を聞いたとき、わたしは子どもながらに不思議に思った。吹雪は人の方向感覚を狂わせるから、道がわからなくなって行き倒れ、凍え死んでしまうというのはわかる。だが家のすぐ手前まで来ていながら力尽きてしまう、あとひと息というところで倒れてしまうというのは、なにもものかの悪意に近い意志が働いているように感じられた。

ある日、わたしはひどい吹雪の中を帰らねばならなくなった。わたしが雪女に会ったのはその日のことだが、その日女は吹雪の中わたしに先立って歩き、わたしを導いて家へ帰してくれたのである。女が歩くところ雪が左右によけて道を作った。そしてはるか向こうに、わたしを安心させるように家の明かりが常に見えていた。わたしが助かったのは子どもだったからだ。雪女は子どもを決して殺さないのである。

今号の内容

白と黒の世界

後記に代えて

白と黒の世界

とうとうウェブサイトを改造して、ワードプレスから脱出した。こんなに開放感を感じるものとは思わなかったが、おかげで自分がこれまでどれほどストレスを受けていたかがわかった。

ご存じない方のために書いておくと、ワードプレスというのはウェブサイトを作るためのソフトウェアのことで、CMS（コンテンツ・マネジメント・システム）と呼ばれるもののひとつである。ウェブサイトは文章や画像、レイアウトの情報などによって構成されているのだが、それを一括して保管、管理するシステムがワードプレスだ。ブログを作るためのソフトとして登場して以来拡大を続け、現在インターネット上に公開されているウェブサイトの四分の一がこのワードプレスを使って作成、管理されているとも云われる。

考えてみたら、ワードプレスとはもうずいぶん長い付き合いなのである。はじめてこれに触ったのが二〇一二年かそこらのことだから、もう十年以上に

なるわけだ。同じくブログ作成ツールであるプログラマーがサービス提供を開始したのは一九九九年のことだ、ワードプレスが生まれたのはもう少しあとの二〇〇三年である。わがワードプレスデビューが二〇一二年というのは少々遅いような気がするが、そこには一応左記のような事情があった。

わたしはインターネット上に個人運営のウェブサイトがあふれていた時代に思春期を過ごしている。わが故郷は東北の僻邑にもかかわらず、当時の町長が非常に進歩的な人で、数々の先進事業を打ち立てたが、その中にインターネット環境の整備があった。おかげで九〇年代の終わりには、すでに町中どこでもインターネット回線が引ける環境が整っていた。中学校の職員室にインターネットに接続されたパソコンが登場し、役場や町営施設のホームページが作られ、わが家も二〇〇〇年ごろにはすでにインターネットのダイヤル回線を引いていた。

これは町内でもかなり早かったほうである。どうもわが家の人たちは代々もの好きらしいふしがあり、祖父も岩手か山形かどこかの電波を拾って、当時県内ではまだ限られた地域でしか見られなかった朝日放送を自分のテレビに映して見ていた。インターネットもおそらくそういう感覚でわが家に導入されたものと思われる。回線を引いたからといって別に使うわけでもなく、そもそも当時のダイヤル回線は使

うごとに料金がかさんでゆくという仕組みだったので、とんでもない金額を使ってしまつて怒られたような記憶がある。

などと書いていることからわかるように、高校生ときわが家にやってきた、このインターネットなるものにわたしは夢中になった。当時のインターネットの主力は個人運営のウェブサイトであり、多くはプロバイダーから提供されるサーバーを利用して、個人が自力で作成して公開していたものである。

そのころのヤフー検索結果画面を覚えておられる方がいるかどうか、それはいまのグーグルの検索結果とはまるで違っていた。今日検索結果の大半を占めるような、収益を上げるために組織的に作成、運営されているウェブサイトなど存在しなかったため、気になる言葉を入れて検索すると、個人がわけのわからぬ情熱を傾けて書いた数万字におよぶ考察や雑記、なりふりかまわぬ主義主張などが検索結果にあふれかえって、非常に魅力的だったものだ。

おそらくわたしが文章の世界というものにほんとうの意味で触れたのは、その本質に触れたのは、本よりもインターネットを通じてである。わたしの場合、インターネットにおける「読む」という経験が、本を読む経験を明らかに上回っている。時間的にも量的にもそうである。本を開いている時間が、インターネットに接続している時間を上回ったのは、おそらくここ七、八年のことに過ぎない。

人生における原体験の時期である十代二十代を、わたしはインターネット上の文章とともに過ごした。そこは名もない市井の人々の場であった。彼らは決して文壇の間でも、評論家でも記者でも、その他言論に関わるあらゆる仕事に関係のある人でもなかったが、それゆえに彼らの文章とそれが作り出すインターネット空間は、なにか人間の社会的仮面の裏側のようなものをあらわしているようであり、決して主流になることのない、表だった社会と対立するものの持つ自由と魅力であふれていた。

そこはお行儀のよい、きれいに着飾った人々が行き交う社会的な場ではなくて、誰ともしれぬ個人が、社会生活においては行き場のない情熱や内面を吐露する場、ひよつとすると髪振り乱し鬼気迫る顔で死にたいとか苦しいとか、ためらみんな死ねとかのたまうことのできる場であった。

事実、このころインターネットはまだ万人のものでなく、利用しているのは少々特殊な人たちだったと云える。そこはまだ社会ではなかった。社会の一部には組みこまれていなかった。そこにはまだルールがなく、倫理もなく、よくしつけられたお育ちのいい人々が熟知り顔で横やりを入れてくるような場所ではなかった。そこはまだ大衆のための場ではなかった。インターネットがほんとうに身近になるのは、体感では携帯電話でのネット接続が当たり前になってからのことで、それはもう少しあと、二〇〇

〇年代の数年を過ぎてからのことだ。

思えば、わたしはその狭間にあったほんの数年の時期に、非常に貴重な形でインターネットに触れていた……わたしはいわば始原のインターネットに触れていたのである。

こんな思春期を過ごす、ウェブサイトを作るということが自己表現の手段の一部として認識されるのも致し方のないことである。わたしの中で、文章を書くということとそれをネット上に読める形にして置いておくということとは、ほとんど無意識レベルで不可分の関係にある。

はじめてウェブサイトを自力で作って公開したのは二〇〇九年のことだ。出会いからすればずいぶん出遅れているように見えるが、ともかくサーバーをレンタルし、ファイルを打ち書き、FTPソフトを使ってアップロードするという一連の作業を経て、わたしはついにインターネット上に家が持ったわけだが、なんだか感慨深い気持ちがあったものである。

もちろん、ただウェブサイトを作るだけならもつと昔からやっていた。親のパソコン（ウィンドウズ98）を使って、メモ帳に見よう見まねでHTMLを書き、はじめてブラウザに「Hello World」を表示させたときの気持ちのことは忘れられないが、どうもあの瞬間に、わたしはブラウザ（イ

ンターネットエクスペローラー！）と恋に落ちたような気がする。こちらが四苦八苦して書いた言語をブラウザが読みこんでくれ、結果をこちらの思いどおりに表示してくれたあの瞬間に。

どこかで書いたか忘れたが、ほんの一年ほどの短い期間、システムエンジニアの見習いをやっていたことがある。就職先は銀行のシステムメンテナンスを請け負っている会社だった。銀行業務を支えるシステムは非常に巨大なものであるが、それが最小限の単位に分割され、数人からなる小さなチームにひとつずつあてがわれる形で運用されていた。各チームはそれぞれ別々の会社から派遣されてきていて（これも従業員数名とか十数名とかの小さな会社のようなであった）、そのチームのいくつかがさらにひとつのグループを形成し、そのグループを統括するのはIBMの社員だった。

IBMの社員というのは、どういう教育を受けているのか、すぐれたリーダーシップを発揮できる優秀な人が多かった。ところがわれわれのグループのリーダーは、コミュニケーション能力や決断力にいま一歩欠けるようになって、早期退職を実現するためにむやみに陽気になって、早期退職を実現するためにいま考えているというあやふやな不動産投資だの農業への投資だのといった話ばかり披露するような、人間くさい人だった。わたしの上司などは、ああい

うIBM社員は珍しいと首をかしげていたが、わたしとしてはそんな優秀な人より、酔っぱらってくだを巻くこの社員に出会えたことのほうがはるかによかつたような気がする。

ともかくその職場において、わたしはUNIXのコマンドにはじまりC言語やSQLというような、少々本格的な言語を学ばされた。わたしにはその手の中に情熱を傾けられる資質はなかつたものと見えて、結局一年足らずで辞めてしまったが、人生わからないもので、このSQLという言語から、わたしはワードプレスに接近していったのである。

ワードプレスのデータはすべてMySQLというデータベースに記録、保存されているのだが、そのデータベースになにかを書きこんだり上書きしたり消したりするとき、そうしろと命令を出すための言語がSQLである。これを仕事で結構頻繁に目にし、使用したために、わたしはワードプレスを自分も使ってみようという気を起こしたのである。

でも実際にやってみてわかつたが、ワードプレスを利用するときに、自分でSQLを使って命令を出すような機会はほとんどない。いまならたいいのサーバーにワードプレスのインストーラー機能がついているから、ボタンを押せばこつちがなにもないでも勝手にデータベースを作成してくれ、あとは記事を書いて投稿するだけという状態までもっていつてくれる。この手軽さは、自力でウェブサイトを

構築しアップロードする手間を考えるとちよつと信じられないほどだ。その便利さに幻惑されて、わたしはしだいにウェブサイト作成はワードプレスで十分だと思うようになり、これさえあればわざわざ面倒な思いをしてファイルをいくつも作ることはないし、手動でサーバーに上げる必要もないし、大変結構なことではないかと思いはじめた。

わたしにはちよつと気が向くと新しいウェブサイトをこしらえようとするくせがあり、その気がなくなるとデータを消去して閉鎖するというようなことをこれまでずつと繰り返してきた。二〇一〇年代のいつかを区切りにそれが手書きファイルからワードプレスに切り替わり、気がついたら二〇二二年になつていたが、一〇年も使いつづけたこの相棒について、ある日突然鼻持ちならないような気がしはじめたのはなぜだつたらう。飽きたというのとは違う。不便を感じているのでもない。でもなにかこいつはわたしに合わないぞというような気が、ある日突然しはじめたのである。

きざしはあつた。たとえばあるプラグインの更新で、開発者側のミスから、そのプラグインがワードプレスに致命的な障害を与え、あやうくウェブサイトそのものをだめにしかけたことがある。あるいはプラグインが意図しない挙動を見せて、それがどうしても解決しなかつたこともある。こうしたことが

重なつて、しだいに自分が手に負えないものを使いつづけているという気がしてどうしようもなくなつてきた。

これもまた知らない方のために書いておくと、ワードプレスにはプラグインと呼ばれる拡張機能が、それこそごまんと用意されていて、これまたボタンひとつでインストールし利用できるようになっていく。その多くが無料で提供されており、かつてわたしがつておいたように、会員制のサイトを作ろうと思えばそれ専用のプラグインがあり、通販サイトを作りたいと思えばそれ専用のプラグインが、あるいはポッドキャストの配信やメールマガジンの配信など、ほんとうにさまざまなが、プラグインひとつでできるようになる。

それがワードプレスの魅力だが、わたしはそんな高性能なものをもはや必要としていない自分に気がついたので、なにより、わたしはプラグインの開発者ではなく、その仕組みについてなにも知らず、なにか起きたときに責任を持つこともできない。そんなものを、わたしのものとして公開していいのだろうか。これはほんとうにわたしのウェブサイトなのか？ 内部でなにが起きているのかわからない、だれが作ったのかもよく知らないものをいくつもインストールしておいて、見た目はひどく洗練されたテンプレート借りてきて、ウェブサイトの外観を洗練されたもののように装つて。

わたしはあくまで自力でファイルを作って、ホームページを自分でデザインするところからスタートした。その体験を、結局は捨てられなかったのではなからうか。ワードプレスは便利だが、マークアップ言語を駆使してファイルを書き、それをパソコンが読みこんで結果を表示してくれるという、あのプロセスがないなら、わたしにとってほんとうのウェブサイトを作成ではないらしいことに、自分がその体験を愛し、それを欲していることに、遅まきながらこの頃ようやく気がついたのである。

そして気がついたとたん、わたしはなにか昔の自分を取りもどす義務のようなものを感じた。わたしの表現とは、もうずいぶん昔から、文章とウェブサイトの両輪でもって成立していたのである。その両者が確実にわたしのこの指先から生み出されるものでないなら、わたしはそれを真実に自分のものであるとは感じられず、それに対して自分が誠実であるとも感じられない。そしてこの分野において誠実でないなら、もはやわたしの誠実などこの世のどこにも存在しないことになる。せめてこの領域でだけは誠実を守りたいものだ。責任を果たしたいものだ。そう感じたのである。

たしか小林秀雄だったと思うが、彼が責任というものについて話しているのを聞いたことがある。動画をネットで見たのかテレビだったか、もう覚えて

いないのだが、内容だけはよく覚えている。人は責任というものを持たねばならぬ、自分は自分の書いたものや自分の発言したことについては責任を持つ、責任をとるということは、最終的には自分が死ぬということだ、それが責任というものだ、というようなことを彼は云っていた。

この話を、ワードプレスについてもやもやしていたある日、ふと思い出したのである。そしておかげで、わたしはほとんど忘れ去られていたわが責任感の一部を思い出した。

責任は、あくまでわたし個人の感じであるが、美意識と非常に近いところにある。小林秀雄がおれは自分の発した言葉には責任を持つよというとき、彼はおそらくその全人格をかけてものを云っているのだと思うが、そしてだからこそ責任のとりかたとして死というものが出てくるのだと思うが、この姿勢は正しい。自己表現という領域において責任がとれないなら、あるいは責任を放棄するなら、そのときにはもうわたしの全人格は完全に否定されるべき、唾棄すべきものとなり、結果としてわたしは死なねばならないし、そんなものはくたばってしまったほうが自分のためにもこの世のためにもよい。表現とはそういうものであり、表現者の誠意というのはそういうものである。小林秀雄のいうことは、まったく正しい。

今回のウェブサイトの改修は、そのようなわたしの責任というものを行使した結果なのである。自分の指先で全ファイルを書くことによって始めて、わたしはわがウェブサイトの真の創造者となるのである、それによつてはじめてわたしは責任を全うできることにもなるのである。

どこから見てもトンチンカンで間抜けなことこのうえないが、わたしはわたしの技術に基づかない、したがってわたしの人格に基づかない数々の先端技術によって、どうも自分自身を必要以上に洗練されたものに見せかけ、必要以上に複雑な存在にしている以上、このような誤謬を完全に免れることは難しいが、しかしこの経験はそうしたことに、わたしなる存在の、あるいは人間存在にまつわる、なにか根源的な間抜けぶりをわたしに明らかにしてくれたような気がする。

他人のものを欲しがり、自分の家にあるものはないというのはいないというのはいない、おそろくひとつの真理であろう。そしてそうした愚かさ、遠回りのようである、遠回りに人は忠実でなければならぬのではないのか。そしてそれが美しいのではないか。他人の庭にある、きれいでうらやましいと思っていた花が、実は大ぶりで派手に見えるだけで、よく見たら花びらのつくりなんか雑で、色もなんだかどぎつすぎる：

…と、こう思うようになったらしめたものである。それはその人の美意識がひとつ、美しさに対する感覚がひとつ、深まったことを意味する。そのときその人が自分の庭に咲いていた小さな雑草…たぶんハルジオンやタンポポのような、どこにでも生えちゃうんざりするほど花を咲かせるやつ…に、なにか不思議な美しさを感じたとしたら、その美しさに忠実であること、雑草だからといってむやみに抜かないこと、間違っても草刈り機で虐殺などしないこと、などは、美の問題からにわかにおのれに課せられた責任の問題へと昇格する。

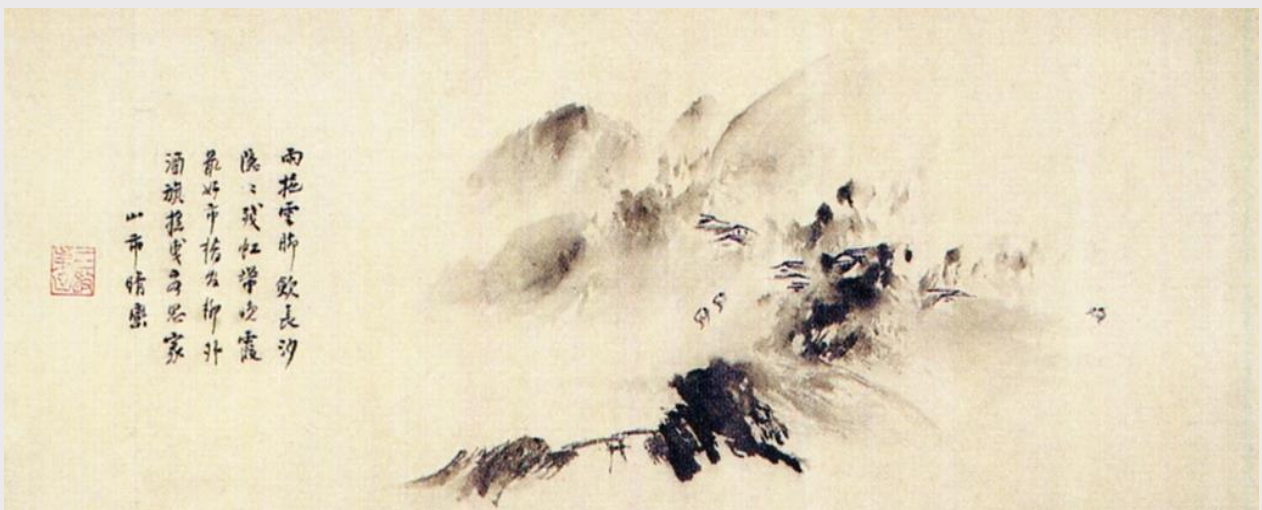
小林秀雄は自分の言葉には責任を持つといった。それは彼がおのれの言葉を、その表面上の間違いや評価はさておき、それを紡ぎ出すおのれというものの、その生命の全時間と全活動とがそこにこめられていることを、深く把握していたことを意味しないか。それが過ちであるなら自分の存在は過ちである。だが彼はあくまでそれに誠実でありつづける自己自身というものを認識していたはずである。結局無知を克服できなかったというようなことを彼はたびたび云っているけれども、おそらくそれは真実で、このような言葉の出でくる源に彼は責任を持つと云っているわけである。

そしてそれはプライドとか自意識とかいうより、美意識の問題のほうである。そのほうが人間として美しいからそうする。そのような美意識に誠実であ

ることが、すべての行動を生む。回り回ってそれが、あらゆる違いを生むことにもなるだろう。たとえ見てくれはほんのささいな行為や違いにすぎないものであったとしても、それがほとんど退化を意味するように見えたとしても。

最近、水墨画が面白いのである。ウェブサイトをすべてモノトーンで統一したのは、この東洋的精神表現の神髄である白と黒との世界に、わたしがあやかりたかったためでもあるし、わたしの世界はそもそものはじめから白と黒とで成り立っていたことに思いを致したためでもある。冬の世界は白と黒との世界であって、わたしは結局生まれたときからその世界に身を置くことを宿命的に義務づけられていたともいえる。

白と黒ないしアオの世界…アオという言葉をその原義に忠実に広い意味にとれば、やはり世界は白とアオとの二色で成立しているのだ。空も山並みもアオである。雲と雪は白である。そして空と山並みというのは、わたしの世界を囲んで守っているふたつのものであり、わたしの世界に支配的なふたつのものである。わたしは途中どこへ抜け出ても、きつとこの世界へ戻ってくる羽目になる。それが摂理の働きというものだ。そしてそれこそが、真にその人に固有の個性と呼ぶべきただひとつのもののはずである。



玉潤「山市晴嵐図」

二〇〇九年に最初に作ったウェブサイトも、考えてみたら黒と灰色とでなっていた。カラーコードでいけば#000と#CCCとである。そのウェブサイトはいまはもうなく、今回「雪下」を改装するにあたって特にその初代ウェブサイトのことを意識していたわけではないのだが、ふと気がついて確認してみたら、両者は驚くほど似ているのである。なんとなく似たようなデザインに着地してしまうというのが、わたしの世界が本質的にどのようなものであるのかを、証ししているような気がする。

後記に代えて

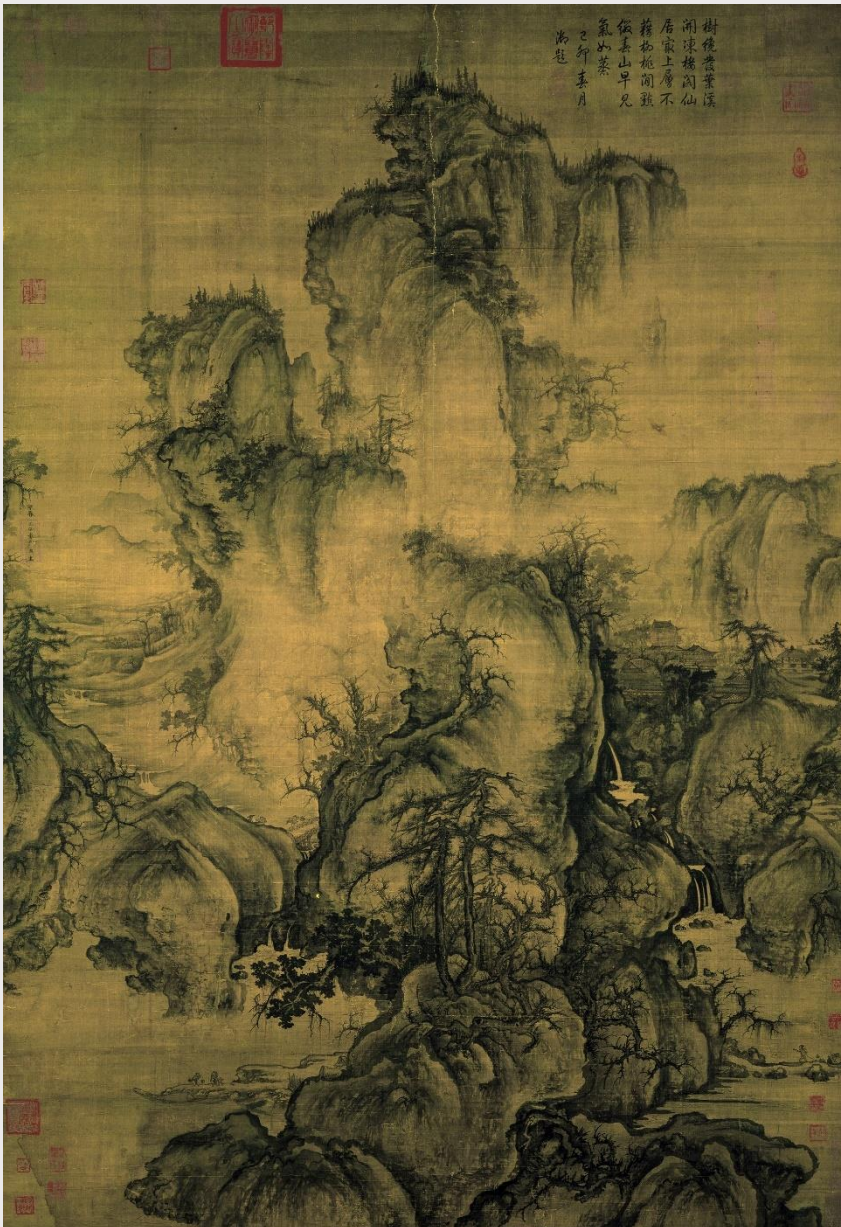
水墨画は面白い。こないだまで全然わからなかったが、最近これがなにを表現しているのかようやくわかってきた。同じように、極度に抽象化された絵画の見どころもようやくわかってきたようである。だからなんだというのではないが、こういうことがわかるのはいいことであり、いま自分がどこを進んでいるのか、どんな地点にいるのか、こういうものが確かな手がかりをくれるような気がする。そしてそのたびに思うのだが、やはりこの道を進んだ人は、わたしより以前に大勢いたのだし、このあとにもきつと大勢いるのだと思えるのである。互いに行

き会うことは多くないかもしれないが、時代やジャンルを変えると結構いる……わたしはなにかそういう人間の一派に属するようである。

二〇二三年一月三十日

水澤雪下

<https://nijibms.com/>



郭熙「早春图」